平成 28 年 3 月 25 日

国立大学法人北海道教育大学長　殿

国立大学法人北海道教育大学
教員養成改革推進外部委員会
委員長　桜　井　康　仁

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会規則（以下「規則」という。）第 4 条第 2 項に基づき、別添資料により意見を報告します。

なお、この報告は平成 27 年 11 月 27 日付北教大教第 73 号で要請のあった事項にかかる最終のものではなく、「国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項（平成 27 年度実施分）」に基づく点検及び評価に限り行うもので、最終の報告は別途行うこととします。

おって、本報告に基づき改善の措置を策定するにあたっては、規則第 5 条第 1 項に基づき、本委員会との意見交換を実施願います。

別添

委員会では、大学から提出された点検シートに基づき観点に係る状況を確認し、観点ごとの分析として《分析結果とその根拠理由》、《優れた点》、《改善を要する点》としてまとめ、加えて今回の点検及び評価のまとめを行い、もって意見とした。

Ⅰ　観点ごとの分析

要請区分Ａ 平成 27 年度教員養成課程における実践的教員養成の状況

観点Ａ－２７－１

自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。

《分析結果とその根拠理由》

・「アカデミックスキル」、「情報機器の操作」、「教職論」、「基礎実習」、「特別支援教育」、「教育実習」及び「教職実践演習」は、必修科目として 3 キャンパス共通開設である。

《優れた点》

・釧路校の「アカデミックスキル」においては、同校の教育のスタンス、教育内容が伝わるものであり、大学に入学したての学生へのメッセージとして適しているものと考える。
・動機付けという意味で 1 年生から学校現場を経験する機会があることは評価できる。

《改善を要する点》

・カリキュラム全体において、この観点にかかる教育をしなければならないのではないか。その際には、どういった科目をどういった順序で学ぶかという順序性についても大切にすべきではないか。例えば、教育実習を終えたところで「学び続ける姿勢」についてもう一度扱っても良いのではないか。実践と理論の往還についても、平面ではなくスパイラルで力量を高め

ていけるカリキュラムが望ましいのではないか。
・現実に世の中で起きていることについて、アンテナを伸ばす教育が重要ではないか。
・体系的な学びを構築し、最終的にはポートフォリオを活用し「教職実践演習」において学生個々の弱点を補っているとあるが、より弱点を補う機会を広げる必要があるのではないか。
・カリキュラムマップと札幌校の資料にある構造図が結びついてくると体系が見えてくるのではないか。３キャンパスに共通する学びと各キャンパスの地域性に対応した学びが整理されることでより明確になるのではないか。
・北海道の教員を養成するという目標を掲げているのであるから、北海道がもつ教育の課題については、各キャンパス間に違いがあってはならない。一方、地域性による課題については各キャンパス間に違いがあることは当然である。この 4 年間をかけて、学校現場の役に立つ教員を養成しているか検証し改革することが必要ではないか。
・地域性を生かすという意味で、３キャンパスの特徴を生かす試みとして、各校間の学生の交流も効果的ではないか。

……

観点Ａ－２７－２

学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。

《分析結果とその根拠理由》

・「教職論」は、1 年次の必修科目として 3 キャンパス共通開設である。
・「学校経営と学級経営」は、札２・旭３・釧３年次の選択科目として 3 キャンパス共通開設である。
・「教育実習事前事後指導」は、3 年次の必修科目として 3 キャンパス共通開設である。
・「教育課程と教育方法」は、2 年次の必修科目として 3 キャンパス共通開設である。
・上記科目は当該観点を満たす内容を含んでいると認められる。
・旭川校においては、「教育課程と教育方法」において学級経営に係る事項が取り扱われている。他の 2 キャンパスにおいてはみえない。
・該当する授業科目として 3 キャンパスは「教職論」と「学校経営及び学級経営」を上げているが、「教職論」と「学校経営及び学級経営」が関連をもって開設されていたのは釧路校のみか。

・該当する授業科目として札幌及び旭川校は「教育実習事前事後指導」を上げているが、釧路校においては上げていない。
・各授業科目を学校現場の経験のある教員が担当している。

《優れた点》
・札幌校の「教職論」は現職の優れた教師が講師として参加しており、教育現場の理解を深める上で、良い構成となっている。
・釧路校の「教職論」においては、学校がチームとして機能するための講義を行っている様子が伺える。

《改善を要する点》
・教育委員会の初任者研修において、学級経営を重視していることを踏まえれば、フィールド研究等の学校支援ボランティアにおいても学校での現場経験を振り返り、理論としっかり往還する学習を行うなど学級経営について学ぶ機会の充実が必要ではないか。
・学校がチームとして機能するための内容が薄いのではないか。
・学校現場の優れた実践家の話も、現場を数多く見ている学生の方が受け止めが大きいだろう。しかし、キャンパスごとに学生の現場経験が大きく異なると効果が弱まる。３キャンパスとも同様の手法を用いるべきではないか。

……

観点Ａ－２７－３
一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業が行われているか。

《分析結果とその根拠理由》
・「倫理・人権」は、１年次の必修科目として３キャンパス共通開設である。
・「演劇と表現」は、２年次の選択科目として札幌校開設である。
・「知的障害福祉実習」は、２年次の選択科目として札幌校開設である。
・「コミュニケーション実践」は、２年次の選択科目として旭川校開設である。
・「教職実践演習」は、４年次の必修科目として３キャンパス共通開設である。
・「発達と教育Ｉ（地域学校教育論）」は、１年次の必修科目として釧路校開設である。
・上記科目は当該観点を満たす内容を含んでいると認められる。
・該当する科目として旭川校は、「教職実践演習」を上げているが、他の２キ

ャンパスにおいては取り上げていない。
・「倫理・人権」は重要な授業であるが、その中で「他と協働しながら問題を解決する」知識・技能等を培うとするのは困難ではないか。

《優れた点》
・釧路校の「倫理・人権」においては、単に講学上の理解に止まらず、学校現場における適用を見据えた理解を求めている。
・旭川校の「コミュニケーション実践」に何かをしようとするアプローチが感じられる。

《改善を要する点》
・コミュニケーション能力の重要性が高まるなか、その育成を個人任せとせず、組織的・意図的に育てるカリキュラムの構築や大学における教育環境の整備等を行うべきではないか。
・生涯学習を進める上で学校教育以外の教育活動である社会教育について、教員を目指す学生が学ぶ機会について検討してもよいのではないか。また、学生を地域に出すことで地域の方々とのやりとりの中で磨かれる部分もあるのではないか。
・旭川校の「コミュニケーション実践」は選択科目であるが、3 キャンパスの学生すべてが履修することが望ましいのではないか。
・あいさつ、身だしなみ、電話の応対、謝罪の仕方など身近な、しかし一般的な社会人としての常識を身に付けることについても教育のなかに取り入れる必要があるのではないか。
・コミュニケーション能力の育成は、講義としては難しい分野だが、一方学校現場で求められていることでもあるし、人材養成として特色を出しやすい部分でもる。将来的に大学の特色としてアピールできる分野であるとも考えられる。より斬新なものがあってもよいのではないか。

……

観点Ａ－２７－４
地域社会との連携にかかる実践的教育が行われているか。

《分析結果とその根拠理由》
・「教育フィールド研究Ⅰ」は、1 年次の選択科目（釧路校は必修科目）として 3 キャンパス共通開設である。
・「教育フィールド研究Ⅱ」は、1 年次の選択科目（釧路校は必修科目）とし

て３キャンパス共通開設である。
・「知的障害児の余暇と健康」は、２年次の選択科目として３キャンパス共通開設である。
・「教職実践演習」は、４年次の必修科目として３キャンパス共通開設である。
・上記科目は当該観点を満たす内容を含んでいると認められる。
・該当する科目として旭川・釧路校は、「教育フィールド研究Ⅱ」を上げているが、札幌校においては取り上げていない。
・該当する科目として札幌校は、「教職実践演習」を上げているが、他の２キャンパスにおいては取り上げていない。
・学校と学校以外の地域社会への学生の参加が図られる仕組みとは、なっていない。
・学校は地域の核。地域の行事に参加することで地域の人々と関係を作っていく、そういう場にいることで、子供を育てるということが実感できるようになる。

《優れた点》
・（特記事項なし）

《改善を要する点》
・この分野こそ、キャンパスの地域性が表れてしかるべき。一番地域社会と連携を感じられなかったのは札幌校。もう少し意図的・計画的にカリキュラムに取り入れていくことが必要ではないか。
・この観点は、観点Ａ－２７－３とも密接に関連して非常に重要な課題である。今後、地域社会との連携がより一層重要になることが想定され、初任の教員も直ちにこれに対応していかなければならない現実があることを認識しなければならない。こうした地域と「関わる力」の育成については、学校現場において養成するだけの時間的余裕がない現状にあって、大学での 4 年間の教育の中で養成されることが求められる。そのことを大学は自覚し、多少の失敗が許されるうちに、学生を学校以外の地域社会へ意図的・計画的に送り込む必要があるのではないか。
・学校は地域の核である。地域の行事に先生が参加しなくてはならない現実を学生は知っておく必要がある。またこのことを通して、子供を育てるという実感を得ることができる。これは大学の講義では得ることのできないものであり、カリキュラムとして位置づける必要があるのではないか。
・学校支援地域本部事業での学校支援ボランティアとして学生が活動することを検討してはどうか。ボランティアの多くは地域の高齢者である。その

中に学生が参加することで支援の実態が掴めるとともに地域の学校に対する思いや距離感といったものを肌で感じることができる。

要請区分Ｂ 現職研修プログラム開発への参画について（以下「要請Ｂ」という。）

観点Ｂ－２７－１

学校経営、危機管理、国際理解、人間尊重の教育の指導についての基礎的・基本的な知識・技能を培う研究が行われているか。

《分析結果とその根拠理由》

・旭川校において「観点」に示された研究は行われている。

《優れた点》

・（特記事項なし）

《改善を要する点》

・この観点については、学校現場や教育委員会における研修ニーズを把握することが必要であり、そのニーズに応じた研究成果や講座の開設実績等に状況を確認することが必要である。

Ⅱ　今回の点検及び評価のまとめ

このたびの点検及び評価は、学長からの要請である実践的教員養成の状況と現職研修プログラムの参画にもとづき、採用時において備えて欲しい最も基本となる力量の育成と研修にかかる現状の課題への対応、をテーマとして観点を設定し実施した。その結果の総括は以下とおりである。

１）授業・教育課程

・授業科目に、観点を満たすための内容の不足があると考えられた。

・授業科目間の関連（履修方法を含む）が充分ではなく、学生に当該観点にしめす教育が行き渡っていない点があると考えられた。

・受講の順序性やカリキュラムの構造について、教育的効果から再検討すべき点があると考えられた。

２）養成する人材像

・実践的指導力を備えた教員養成を目標としているが、学校現場の実際を取り入れた授業が充分でない点があると考えられた。また、今後、学校と地域の連携が一層重要になることを踏まえ意図的に学生が地域と「関わる力」を育成することが必要と考えられた。

３）現職教員の再教育の在り方

・現職研修の課題として掲げた事項に関する研究の状況が、確認できた。今回は旭川校のみ回答を得たが、このように偏在して良いものか今後検討を重ねる必要があると考えられた。

４）その他

・各キャンパスに優れた取組が見られたが、そのことが教員養成課程全体で共有されていないため、課程の質的向上に繋がっていかない状況がみられた。今後は課程全体として質的向上を図るための組織的取組を構築する必要があると考えられた。
・また、そのためにカリキュラムマップやポートフォリオをどのように有効活用していくか検討する必要があると考えられた。
・一方、地域社会との関わりについて、各キャンパスの特色を出すべきであり、都市部であっても意図的に取り入れて行くことの必要性が認められた。

（添付資料）

・国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成 27 年度実施）【大学提出分】

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	札幌校

※［観点に係る状況］作成日　平成２８年３月３日

別紙に記載

※［関係資料］

シラバス「情報機器の操作Ｈ」、シラバス「アカデミックスキル」、シラバス「教職論Ｈ」、シラバス「基礎実習Ｈ」、シラバス「特別支援教育ｉ」、参考資料１（教育実習自己計画書チェックリスト）、参考資料２（電子ポートフォリオ）、シラバス「教職実践演習（教諭）Ｋ」

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

別紙　A-27-1［観点に係る状況］作成日　平成 28 年 3 月 3 日

本観点にかかる授業科目は，専攻・分野によって多岐にわたるため，それらを個別に説明することは現実的ではない。したがって，ここでは札幌校の全専攻・分野の学生が共通に履修する科目（7 科目）を例に，これら科目の内容，科目間のつながり（系統性と往還）について記述することを通し，「教師自らが問い続ける力」がどのように育まれているか示す。

下の図は，教育課程（カリキュラム）の構造を示したものである。この図にしたがって，取り上げた 7 つの科目の位置づけを表に示す。

教育課程(カリキュラム)の構造

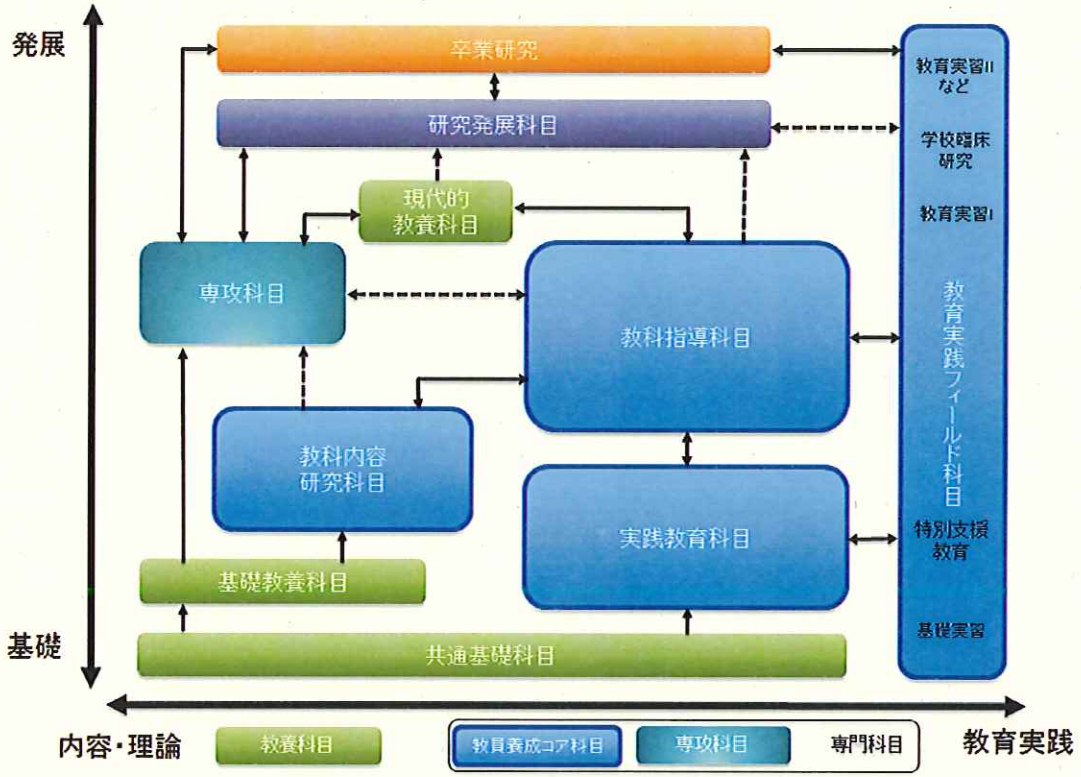

表　観点に係る科目とその位置づけ。

科目区分		1 年	2 年	3 年	4 年
教養科目	共通基礎科目	情報機器の操作 ｱｶﾃﾞﾐｯｸｽｷﾙ			
教員養成コア科目	実践教育科目	教職論			教職実践演習
	教育実践 フィールド科目	基礎実習	特別支援教育	教育実習	

なお，以下の説明に際し用いたシラバスは，主に理数教育専攻・理科教育分野のものである。

【大学での学びを保障する基礎的な技術・考え方の修得】

教養科目のうち基礎共通科目（図の■部分）は，教員養成課程の学生に，共通に身につけさせるべき基礎的な知識・技能の習得などを目標とする科目区分である。この科目区分には「情報機器の操作」と「アカデミックスキル」が含まれる。

「情報機器の操作」（1年・前期）のシラバスにあるように，情報の取捨選択を含めたインターネットを介した情報の扱い方（情報の倫理）や，重要な情報収集の場の一つである図書館の利用の仕方などについて学ぶことを目標にしている。また，収集した情報（理科ではデータ）の数的処理やグラフ化，文書でのまとめに必要な基本ソフトの使い方について，理科の4つの分野（物理，化学，生物，地学）に応じた具体的な例を取り上げ，パソコンを中心とした大学での学びの基礎的な技術を修得させている。

「情報機器の操作」と同じ科目区分に含まれるのが「アカデミックスキル」（1年・前期）である。「アカデミックスキル」では，専攻・分野に共通な学ぶべき事項として以下の5つの項目がある：1）ノート・ティキングの方法，2）レポートの書き方，3）情報検索の方法，4）ディスカッションの方法，5）プレゼンテーションの基礎（シラバス参照）。シラバスにあるように「情報機器の操作」と類似した項目も含まれているが，「情報機器の操作」ではパソコンをツールとして使うための技術的な面の学びが中心であるのに対し，「アカデミックスキル」では，思考の過程や論理に基づいて，わかりやすい文章を作成するための作法（レポートの書き方）やプレゼンテーションの仕方（プレゼンテーションの基本的な方法）などを学ぶことを目標としている。

「情報機器の操作」と「アカデミックスキル」を通じ，パソコンなどの情報機器の操作，これらを使っていかに論理的で説得力のある文章やプレゼンを行うかの基礎を修得させ，大学での学びの技術や考え方の基礎を培う。また，前者は近年求められている教育現場でのICTを活用の基礎でもある。

【教師となるための学びの基礎】

教員養成コア科目（図の■部分）は，実践教育科目，教育実践フィールド科目，教科指導科目，教科内容研究科目から構成され，教育についての理論を学ぶとともに，教育現場での実践を振り返りながら教員を目指す学生がそなえるべき資質能力について自ら考えるとともに，自身の適性や不足している資質能力の獲得をねらいとしている。

「教職論」（実践教育科目）と「基礎実習」（教育実践フィールド科目）は，何れも1年前期に実施している科目で，相互に関連のある授業科目である。「教職論」では（シラバス参照），1）これまで児童・生徒として見ていた学校と，教える立場で見る学校の違いを知ること，2）学校や教育現場に対する様々な立場からの期待や要望を知ること，3）学校をめぐる実情や問題点について理解することを目標に，外部講師を交えた講義と，講義を受けた後の専攻・分野別のグループ討論を柱とする授業構成となっている。

「基礎実習」（シラバス参照）では，小学校，中学校，特別支援学校を訪問し，学校の様子や授業の様子を，「教師として」の立場で「観」る，あるいは「自分が教えるとしたら」「自分が働くとしたら」という視点から「観」ることを通じ，学生自身の教職へのイメージを形成させること，教師として必要な資質能力について自ら考える機会としている。

教師となるための学びの基礎として，もう一つの重要な科目は教育実践フィールド科目における「特別支援教育」である（シラバス参照）。知的障害や言語障害などをはじめとする特

別支援教育の対象となる障害について，その特性と，特性に応じた教育の内容について学ぶ。この学びは，いわゆる介護等体験（義務教育諸学校の教員免許を受けるのに必要な介護などを基調とする体験活動；札幌校では「教育フィールド研究Ⅲ」2 年・必修）あるいは「教育実習」を受けるのに必要な基礎的知識の修得を目標としている。

【教育実践と振り返り】

上に見てきたような科目を通じ，教員をめざす学生として必要な基本的知識や技能を学ぶとともに，実際に学校に出かけて学校についての見方や考え方を 2 年次までに学ぶこととなる。また，図（教育課程の構造）に見るように，「教科内容研究科目」や「教科指導科目」を通じ，授業を行うのに必要な基礎的知識と技能も学ぶ。これらを土台に学生は「教育実習」（教育フィールド科目；3 年）に臨む。教育実習に際しては，大学が作成している「学び続ける教師をめざして　ステップアップ・チェックリスト　ハンドブック」に示されている 4 つの自己点検項目（「学習指導」「子ども（幼児・児童・生徒）の理解」「社会性・対人関係」「教育的愛情・使命感・責任感」）について，事前に学生自身が複数の課題（チェック項目）を設定し，その課題を意識しながら実習に取り組む。具体的には，「教育実習記録」の中に「教育実習自己計画書（チェックリスト）のページがあり（参考資料 1），そこに実習全般についての「自己目標」を記載し，さらにチェック項目欄に学生自身がチェックリストから選択・設定した目標を記載し，実習終了後に自己評価を記述する。このことにより，教育実習を通じて教員を目指す学生がそなえるべき資質能力について，自身の不足している部分を確認し，実習を終えた後の大学での学びの課題とする。

4 年・後期には，「教職実践演習」（実践教育科目）において，4 年間の学びの総括と自身の課題解決のための活動が行われる。大学情報システムにより作成した 4 年間の学びの振り返りである電子ポートフォリオ（参考資料 2）に基づき，4 つの項目（「使命感や責任感，教育的愛情等に関する事項」「社会性や対人関係能力に関する事項」「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」「教科・保育内容等の指導力に関する事項」）について，学生自身がその達成度を評価し，達成が不十分な部分を補うことを目標としている。例として挙げたシラバスでは，附属札幌小学校・中学校および特別支援学級がそれぞれ開催する教育研究大会への参加とその後のディスカッション，教職大学院の実務者教員による「生徒指導に関わる講義・ディスカッションなどを通じ「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」の補完を図るなど，教育実習では十分に学ぶことが難しい部分に重点を置いて学生の指導力と課題解決に必要な力の育成を図っている。

以上示してきたように，札幌校の全専攻・分野の学生が共通に履修する科目（7 科目）を通じて，学生自身が教師としてそなえるべき資質能力について考え，それを大学の学びの中で解決できるような科目構成となっていることを示した。これらに加え，上に取り上げなかった専攻・分野毎に開講している科目を通じ，学校現場とつながりながら課題解決の能力を育む科目が設定されている（分野やゼミ単位で実施されている「教育フィールド研究Ⅳ」）。また，専攻科目や研究発展科目（専攻・分野に特有な課題解決のための知識の修得と統合），卒業研究（テーマを設定しての課題解決）を通じても，自ら考え問い続ける力が培われている。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	札幌校

※［観点に係る状況］作成日　平成２８年１月２５日

本観点にかかる授業科目として「アカデミックスキル」を挙げることができる。本科目は，平成27年度からの教育課程において新たに設定された科目で，専攻・分野に共通な事項として以下の5つの項目を含め実施されている；1）ノート・ティキングの方法，2）レポートの書き方，3）情報検索の方法，4）ディスカッションの方法，5）プレゼンテーションの基礎。一つの例として，芸術体育専攻音楽教育分野で行われている内容について，点検事項に沿って別紙に記載した。

※［関係資料］

別紙（該当科目シラバス）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

授業科目名	アカデミック・スキルK
修得年次	１年次（札幌校 芸術体育教育専攻 音楽教育分野 学生対象）
必須・選択	必須
授業計画	第０回　　このシラバスを配付して読む 第１回　　書く技術①：講義を記録する（ノート・テイキングの基本） 第２回　　書く技術②：講義を記録する（ノート・テイキングの工夫） 第３回　　書く技術③：授業観察の方法（ノート・テイキングの応用） 第４回　　読む技術①：アカデミック・リーディングの基本 第５回　　読む技術①：アカデミック・リーディングの工夫 第６回　　考える技術①：思考を生み出すための方法 第７回　　考える技術②：思考を拡げるための方法 第８回　　レポート作成の技術①：アカデミック・ライティングの基礎（レポートの形式と内容） 第９回　　調べる技術①：アカデミック・ライティングのための情報検索方法 第１０回　調べる技術②：「書く」ために「読む」 第１１回　レポート作成の技術②：情報整理の方法 第１２回　ディスカッションの技術：意見・根拠・例示・反論・統合 第１３回　レポート作成の技術③：読み手を想定したレポート構成を考える 第１４回　伝える技術①：レポートに基づくプレゼンテーション（前半） 第１５回　伝える技術②：レポートに基づくプレゼンテーション（後半） 授業目標： ○大学生活において、主体的・創造的に学んでいくための基礎力を身に付ける。 ○適切な方法と内容に基づいてレポートを作成することができる。
授業の方法	当該授業科目は初年次教育の一環であり、そこでの学習内容は、講義・演習や実習などの場面での学び方や、学術研究の基盤となる知的生産の方法などの、「スキル（技術）」の習得が中心となる。そうしたスキルを身に付けさせる際に用いる素材や具体的事例として、「幼児期・幼児教育」や「子ども理解」に関わるテクストや話題を多く位置付けている。そうすることにより、文献資料を講読してその内容をレジュメに整理要約する練習（アカデミック・リーディング）や、レポート作成のためのさまざまな技法（アカデミック・ライティング）を知ることと並行して、子どもへの興味関心を喚起し、人間の成長・発達の観点から子どもを捉えることの重要性に気付かせるようにした。身に付けるべき「スキル（技術）」と、そのスキルで取り扱う「内容（子ども理解）」を有機的に結びつけながら授業を進めることで、受講学生自らが追究したくなるような課題に出会うことができるよう動機づけている。また各回の授業では、個人思考→グループ思考→個人思考という流れで自分の考えを相対化させたり、自分自身にとっての直接的情報（基礎実習における実体験など）と、間接的情報（文献講読で得た知識など）を意識的に往還させたりすることで、情報を取捨選択することの必要性に気付かせるようにしている。これらの方策を上記「授業目標」への到達経路とすることで、観点中に示されている課題追究、情報選択、継続的思考などに関わる姿勢・態度の育成を目指している。
教授者の現場経験	授業担当者の個人史的背景としては、学校教育現場での勤務経験を有している。アカデミック・スキルでの学びが、大学での学び進め方や、学術研究の基礎力としてだけではなく、「教師への学び」や「（将来の）教師としての学び」としても有効であることは、適宜、受講学生にも伝えている。
観点に応える理由	授業計画中に「書く技術」「読む技術」「調べる技術」として示した第1回～第5回、および第9回～第10回の授業内容は主に、観点中の「自ら課題を追究」して「情報を取捨選択」するための基礎力を身に付けることに対応している。 第6回～第7回の「考える技術」では、マインドマップなどのツールで思考や連想を拡散させたり、逆に、KJ法を用いて子どもに関する情報を収束的に整理させたりすることで、「自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢」の実現を目指している。 第8回、第11回～第15回の授業内容は「考える技術」「レポート作成の技術」「ディスカッションの技術」「伝える技術」であり、観点に示されている当該授業科目での学びの姿を、レポートという学習成果物へと可視化していくことが主眼である。子どもについての思考や調査から受講学生が導き出したテーマには「好奇心」「遊び」「発達」などがあるが、これらのテーマを探究していくことは、「学校現場の課題」や「教師自らが考え問い続ける」べき力とも密接である。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－２　学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。
観点の説明	学校がチームになって学校力を高める取組を進めている。この取組には、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能が不可欠であり、現場経験の豊富な教員による教授が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	札幌校

※［観点に係る状況］作成日　平成２８年１月２５日

本観点に関わる科目として，まず「学校経営と学級経営」が挙げられる。観点に含まれる語句がそのまま科目の名称として使われており，別紙に示したように担当している教員も現場経験の豊富な教員である。

この科目以外で本観点に関わる科目として，１年次学生に必修として課している「教職論」を挙げることができる．また，学級経営や学校経営の一端を学ぶ場として「教育実習」が重要な位置を占めるが，受入れ学校によってその指導内容は異なることから，事前あるいは事後の指導において，学級経営や学校経営に関わる基本的な事項を教授することが必要である．このことを担う科目として「教育実習事前事後指導」を挙げることができる．「学校経営と学級経営」「教職論」および「教育実習事前事後指導」の三科目について，点検事項に沿って別紙に示した．

※［関係資料］

別紙（「学校経営と学級経営」および「教職論」はシラバス，「教育実習事前事後指導」は教育実習（主免）事前指導資料）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

授業科目名	学校経営と学級経営
修得年次	２年次
必須・選択	選択
授業計画	本授業では、教育課程の編成・実施、学習指導や生徒指導の体制づくりと指導の在り方、組織マネジメント、開かれた学級経営の留意点等について、理論と実践事例を通して基礎的知識と能力の習得・活用を目指します。 1　学校経営・学級経営全般について（オリエンテーション） 2　求められる教師像 3　教科経営(1)　よい授業とは？ 4　教科経営(2)　授業づくりの実際 5　教科経営(3)　学習評価、教科経営のまとめ 6　学級経営(1)　よい学級とは？ 7　学級経営(2)　学級の自治活動 8　学級経営(3)　安全指導、学級経営のまとめ 9　生徒指導(1)　いじめへの対応 10　生徒指導(2)　不登校への対応 11　生徒指導(3)　危機管理（学校事故等） 12　学校経営(1)　教育法規の理解 13　学校経営(2)　教育課程の編成実施 14　学校経営(3)　学校組織マネジメント 15　学校経営(4)　開かれた学校づくり、教育の今日的な課題 16　まとめ（試験）
授業の方法	毎回の授業の導入部において、受講生に対し、教育に関する１週間のニュースや出来事を発表させ意見交流を行っている。展開部では上記の授業計画に沿って、学校経営や学級経営、教科・生徒指導など毎回講義テーマを設定し、講義形式、問答形式、小集団による意見交流形式等を織り交ぜながら授業を行っている。
教授者の現場経験	本授業の教授者は、中学校教諭として２０年、教育委員会指導主事として９年の経験を有している。
観点に応える理由	本授業は、中学校教員及び教育委員会指導主事の経験を有する教員が担当し、学校経営や学級経営等に関する豊富な現場経験を生かした理論的実践的な指導を行っている。

授業科目名	教職論
修得年次	１年
必須・選択	必須
授業計画	【第１回】4/10（金） 全体ガイダンス（並川寛司先生）電子ポートフォリオの説明（前田賢次先生） 全体講演（本学副学長 渡部英昭先生） 【第２回】4/17（金） 附属中から基礎実習事前指導 教職実践コーディネーターによる講演（谷山圭子先生） 【第３回】4/24（金） 学内講師による全体講演「授業の見方と記録の方法」（佐々木貴子先生） 【第４回】5/1 （金） 専攻・グループ別討論（佐々木貴子先生のご講演の振り返り＋基礎実習事前指導） 【第５回】5/15（金） 専攻・グループ別討論 【第６回】5/22（金） 学内講師による全体講演「日本の教育と外国の教育」（庄井良信先生） 【第７回】5/29（金） 専攻・グループ別討論 【第８回】6/5 （金） 学外講師による全体講演「特別支援教育とは」 （拓北養護学校長 児玉稔先生） 【第９回】6/12（金） 専攻・グループ別討論 【第１０回】6/19（金） 専攻・グループ別討論 【第１１回】6/26（金） 学外講師による全体講演「スクールカウンセラーから見た学校」（札幌市スクールカウンセラー 滝川秀子先生） 【第１２回】7/3 （金） 専攻・グループ別討論 【第１３回】7/10（金） 外講師による全体講演「授業の実際と課題」 （札幌中学校 堀 裕嗣先生） 【第１４回】7/17（金） 学内講師による全体講演「学校教育と保健」 （保健管理センター長 羽賀將衛先生） 【第１５回】7/24（金） 専攻・グループ別討論
授業の方法	・全体ガイダンス ・学内外の講師による全体講演 ・専攻・グループ別討論
教授者の現場経験	現役教諭・養護学校長・スクールカウンセラー・保健管理センター長など
観点に応える理由	本授業では，現役教諭，養護学校長，スクールカウンセラー，保健管理センター長を招き講演を行ってもらっている。よって学級経営や学校経営に関する現場経験の豊富な教員による指導が行われていると考える。 また授業計画にあるように，副学長による講演や，本学教員による専門的内容の講演，学外から招いた現場経験豊富な教員の講演を，本授業は含んでおり，さらに教務課・事務職員の本授業への協力などを鑑みると，学校がチームになって学校力を高める取組を進めている授業と思われる。 なお，学生は聴講するだけではなく，課題に対するレポートを作成し，この授業が議論を行う場を与えることで，知識を深化させている。その議論における取り纏め役は，様々な専門分野の本学教員が協力して行っている。

授業科目名	教育実習事前事後指導
修得年次	3年次
必須・選択	必須
授業計画 授業の方法	全専攻を対象に行う全体オリエンテーションに加え，専攻毎にオリエンテーションを行い，学校種による児童・生徒の実態の違い，学習指導の特徴とその実際などについて附属学校の教員の指導を受ける．以下，学校種および専攻の違いによる指導内容について示す． 小学校で教育実習をする教育臨床専攻ならびに基礎学習開発専攻小学校主免の学生については、4月17日に札幌校で全体オリエンテーション（4校時目）、5月15日に附属小学校でオリエンテーション（9:00～12:10）、5月20日に附属小でオリエンテーション（9:10～16:30）、5月21日に附属小でオリエンテーション（11:15～16:00）、6月3日および12日に札幌校で教科教育学の指導（5校時目）、6月19日に札幌校で再び全体オリエンテーション（4校時目）をおこなう順序で事前指導とし、10月23日に札幌校でいくつかの実習校ごとにグループを作り事後指導をおこなった（4，5校時目）。 小学校で教育実習をする特別支援教育専攻の学生については、4月17日に札幌校で全体オリエンテーション（4校時目）、5月19日にふじのめ学級でオリエンテーション（10:40～12:55）、5月20日に附属小でオリエンテーション（9:10～16:30）、５月２１日に附属小でオリエンテーション（11:15～16:00）、６月３日ないし１２日に札幌校で教科教育学の指導（５校時目）、６月１９日に札幌校で再び全体オリエンテーション（４校時目）をおこなう順序で事前指導とし、１０月２３日に札幌校で専攻での事後指導をおこなった（４，５校時目）。 中学校で教育実習をする養護教育専攻の学生については、４月１７日に札幌校で全体オリエンテーション（４校時目）、５月７日に附属中でオリエンテーション（9:00～12:30）、５月２１日に附属中でオリエンテーション（9:00～17:00）、６月９日に附属中でオリエンテーション（13:30～17:00）、６月３日ないし１２日に札幌校で教科教育学の指導（５校時目）、６月１９日に札幌校で再び全体オリエンテーション（４校時目）をおこなう順序で事前指導とし、１０月２３日に札幌校で専攻での事後指導をおこなった（４，５校時目）。 中学校で教育実習をする総合学習開発専攻ならびに基礎学習鵜飼発専攻中学校主免の学生については、４月１７日に札幌校で全体オリエンテーション（４校時目）、５月７日に附属中でオリエンテーション（9:00～12:30）、５月２１日に附属中でオリエンテーション（9:00～17:00）、６月９日に附属中でオリエンテーション
教授者の現場経験	オリエンテーションでは，附属小学校、附属中学校、ふじのめ学級の現場教員が担当している。
観点に応える理由	附属小学校、附属中学校、ふじのめ学級でのオリエンテーションは附属学校の教員が担当し、現場経験が豊富な教員による指導となっている。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－３　一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業が行われているか。
観点の説明	保護者・地域との連携や教員が組織として機能するためには、社会性・コミュニケーション力や問題解決のための分析能力の獲得が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	札幌校

※［観点に係る状況］作成日　平成２８年１月２５日

本観点のうち，一般的な社会人あるいは将来教職に就く者として必要な常識について学ぶ科目である「倫理・人権」について，点検事項に示された事項に沿って別紙に示した．また，観点の「他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培い，場に応じた対応ができる社会性・コミュニケーション力を培う」「科目」として「演劇と表現」，他者や異文化を理解する「科目」として「知的障害福祉実習」を取り上げ，点検事項に示された事項に沿って別紙に示した．

※［関係資料］

別紙（該当科目シラバス）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

授業科目名	倫理・人権（共通講義）
修得年次	1年次
必須・選択	必須
授業計画	第１講〔講義①〕「なぜ倫理・人権なのか，なぜ人権を学ばなくてはいけないのか」　担当：安井友康，コーディネーター【講堂】 ・ガイダンス ・人間の多様性から障害児者の人権を考える 第２講〔講義②〕「身の回りの人権侵害とコンプライアンス」　担当：扇子幸一【講堂】 ・聖職性と問題行動。 ・問題行動は「問題のある人」が？ ・内なる自然と社会規範。 第３講〔講義③〕「インターネットと倫理・人権」　担当：菅　正彦【講堂】 ・教員養成課程の学生として，インターネットを「倫理・人権」の面から考える。 ・「他人事ではありません。自分のことです。」 ・「わかっているはずなのに，やってしまう。」 第４講〔演習Ⅰ〕講義①から③までをふまえた演習　担当：演習担当教員【演習教室】 第５講〔講義④〕「人権：憲法から実社会の法律問題へ」　担当：猪野　亨（弁護士）【講堂】 ・憲法が保障する人権とは何か。 ・実社会での法律問題。 第６講〔講義⑤〕「差別・偏見・抑圧を乗り越えよう」　担当：菅野淑子【講堂】 ・私たちの社会のなかのさまざまな差別・偏見・抑圧。 ・差別・偏見・抑圧を克服するための種々の営み・試み。 第７講〔演習Ⅱ〕講義④と⑤をふまえた演習　担当：演習担当教員【演習教室】 第８講〔講義⑥〕「なぜ倫理を学ばなくていけないのか」　担当：佐山圭司【講堂】 ・他者との関係のなかで人ははじめて「人－間」として生きることができる。 ・「他者危害禁止原則」（Harm Principle）と「してはならない」「しないほうがよい」行為。 ・自由と責任について。 第９講〔講義⑦〕「倫理はどこで，どのように使われるか」　担当：中川　大【講堂】 ・倫理学がどのように応用されているかを，生命倫理，環境倫理，動物倫理などの事例から話題を選び，検討する。 ・倫理学は，それが適用される場面において，その原則が試される。応用の事例から原理的な問題に立ち返るしかたを学ぶ。 第10講〔演習Ⅲ〕講義⑥と⑦をふまえた演習　担当：演習担当教員【演習教室】 第11講〔講義⑧〕「〈性の尊厳〉について考える」担当：山崎菊乃（NPO法人 女のスペース・おん）【講堂】 ・性の尊厳とデートDV。 ・互いの人権を尊重する関係を築く。 第12講〔講義⑨〕「ジェンダー・コンシャスネスを高めよう」　担当：三浦直登（恵庭南高校）【講堂】 ・ジェンダーとは何か。 ・セクシュアルマイノリティ・学校・社会。 第13講〔講義⑩〕「〈男女共同参画社会〉の実現に向けて」　担当：笹谷春美（北海道立女性プラザ館長・本学名誉教授） ・今，なぜ，男女共同参画社会なのか。 ・男女共同参画社会とはどのような社会か。 ・国連の女性差別撤廃条約から日本の男女共同参画社会基本法まで（世界の動き，日本の動き）。 ・男女共同参画社会・ジェンダー平等はどうやって実現できるか。 第14講〔演習Ⅳ〕講義⑧から⑩までをふまえた演習　担当：演習担当教員【演習教室】 第15講〔総括演習〕倫理・人権とコンプライアンス　担当：演習担当教員【演習教室】 ・あらためて，倫理・人権の意義について考える。 ・倫理・人権を，どう身につけ，教え・伝えるか。
授業の方法	まず，この授業の目標（全学共通）は次の通りである。「自らの思考や行動の指針となる実践的な力を養うために，倫理・人権及びコンプライアンス（法令順守）の基本を学ぶとともに，将来学校教員として，また地域社会あるいは文化・スポーツ活動の積極的担い手として，これらの価値を教育・伝達していく際の基礎的内容を習得する。差別や人権抑圧があることを知り，その被害者や加害者にならないために必要な知識を得る。」 全15回のうち，講堂での全体講義を10回，グループ演習を５回行っている。10回の講義では，十分な質疑応答の時間を設けるとともに，後日の演習のためのディスカッションポイントを提示する。演習ではディスカッションポイントを参考にグループ討議と討議内容の発表を行う。このような共同の学びを通して，上記目標に示されたような，将来の社会人としての倫理・人権の基礎的な知識を培うとともに，社会性・コミュニケーション力や問題解決のための分析能力の獲得を目指す。
教授者の現場経験	学外講師４名は講義テーマに関わる各分野の実践家である。
観点に応える理由	１．授業計画に示した10回の全体講義の内容は，「なぜ人権を学ばなくてはいけないか」，「社会の中にある差別や偏見，抑圧について」，「なぜ倫理を学ばなくてはいけないか」，「ジェンダーをめぐるさまざまな問題について」の４つのユニットで構成されている。ここで取り上げる講義内容は，「観点」にある社会人として必要な基礎的な知識であるとともに，自らの思考や行動の指針となる実践的な力を養うための基礎的な知識でもある。各ユニットの内容を受けた演習は，「観点」の他と協働しながら問題を解決するための知識・技能・態度を培うものである。 ２．授業の方法として，各グループでの演習（ディスカッション）に取り組ませていること，講義と演習を連動させていること，そして全体講義における質疑応答時間を十分に保障していることは，全学生が課題を共有し，他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度の習得を実現するための工夫である。

授業科目名	演劇と表現
修得年次	２年
必須・選択	選択
授業計画	第1回　間の教育を学ぶ。「承認欲求」を知る。私たちは認める側になれないか？ 第2回　あいづちは会話のレギュレーター（調節器）。谷川俊太郎「ことばあそびうた」 第3回　コミュニケーション上手の３Kとは？正常化の偏見（災害心理学）を知る。 第4回　「劇」の字義。五感のチェック（自分はどこで、他人を感知しているのか） 第5回　フォーカスチェンジ（錯覚）に学ぶ。「注文の多い料理店」をフォーカスチェンジ。 第6回　受容と表現。「世界のキャッチボールゲーム」から「会話」をつくる。 第7回　シアター（インプロ）ゲーム。身体表現の即興ワークショップ① 第8回　シアター（インプロ）ゲーム。身体表現の即興ワークショップ② 第9回　「絵で伝える」。言葉は相手にオファーを伝える一手段でしかない。（言葉だけに頼らない） 第10回　音楽を聴いて身体を動かす。「まほうのふで」レッスンで原風景を知る。 第11回　ゼスチュアは伝わらない？ゼスチュアとパントマイムのちがい。 第12回　「ジブリッシュ（でたらめ語）」。その時の思い、感動をジブリッシュで表現する。 第13回　考え方のレッスン。カギはひとつではない。「進む」「扉」二題。 第14回　「三年とうげ」「おまつり」等、教科書を立体化（演劇）に！群読の手法を知る。 第15回　単対単から多対多の表現へ。集団の中で自分の役割を考える。
授業の方法	演劇表現に関わるさまざまな知識を身に付け、それらに基づくワークショップ（演習）を通して、教育者に必要とされるコミュニケーション能力やシンボル表象能力を身に付けることを目的とする。授業形態は，少人数によるワークショップを主に行い，各種課題へ取り組む。
教授者の現場経験	直接指導は劇団で活躍する俳優が行う。
観点に応える理由	授業計画が「演劇表現に関わるさまざまな知識を身に付ける」内容となっており，観点の社会性・コミュニケーション力の獲得に対応する。 授業の方法の「少人数によるワークショップで行う各種課題」の部分が，観点の「問題解決のための分析能力の獲得」を実現するための工夫である。

授業科目名	知的障害福祉実習
修得年次	2年次
必須・選択	選択
授業計画	オリエンテーション 事前指導：福祉施設の理解、利用者の理解、実習手帳の記載方法ほか 本実習　5日間 事後指導：振り返りと、実習報告会の実施
授業の方法	知的障害児者を中心に、福祉施設での生活の様子や福祉の取り組みなどについて理解を深める 障害のある子どもたちの学校卒業後の様子や地域背の生活支援の現状を理解するため、地域の障害者支援施設において実際の支援現場を体験する。福祉機関の機能の概要を理解するとともに、福祉施設で働く職員の役割、施設の利用についてその生活に対する考え方などについて考える視点を持つ。
教授者の現場経験	障害者支援施設における指導員経験者による事前事後指導と障害福祉現場の支援者による指導
観点に応える理由	授業の内容の「本実習5日間」の部分が，観点の「一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業」に対応する内容である。 授業の方法の「地域の障害者支援施設において実際の支援現場を体験する」の部分が，観点の「他と協働しながら問題を解決する」を実現するための工夫である。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	A－２７－４　地域社会との連携にかかる実践的教育が行われているか
観点の説明	価値観の多様化やメディアの発達により、児童・生徒が校外で接する様々な要因は、学習や生活習慣に影響を与えている。家庭を含む地域社会の理解と支援なくしては、児童・生徒への効果的な指導は困難である。一方で、学校や教師も地域社会の一員であることから、教員養成課程でもその自覚を促し、実践できる場を設ける必要がある。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	札幌校

※［観点に係る状況］作成日　平成２７年１月２５日

札幌校の「教育フィールド研究Ｉ」は，様々な学校種での教育支援活動（ボランティア）を内容とし，この活動を通じ，これまでの（入学前の）教育を受ける立場から，教師に近い立場から児童・生徒の実態を見ることを通じて家庭を含む地域社会への理解を深めることができる科目である．この科目について，点検事項に沿って別紙に示した．

学校や教師も地域社会の一員であることを学ぶ科目として「知的障害児の余暇と健康」および「教職実践演習」を挙げ，点検事項に沿って別紙に示した．なお，「教職実践演習」は，専攻あるいは分野毎にグループで実施されている．いずれのグループでも，例として挙げた内容に示す①から④の事項を含む構成となっている．

※［関係資料］

別紙（該当科目シラバス）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

授業科目名	教育フィールド研究Ⅰ
修得年次	1-4年
必須・選択	必須
授業計画	4月上旬　前期・後期履修者対象の趣旨説明会，オリエンテーション 4月中旬　参加申込書提出期限 4月下旬　履修登録期限 5月上旬　1) 一斉指導：ボランティアガイダンス（支援先決定，事前指導(1)，教育委員会・学校関係者によるガイダンス） 5月中旬　2) 一斉指導：事前指導(2) 5月下旬　支援活動開始 7月下旬　3) 一斉指導：情報交換会 8月頃　地域活動委員会等による支援先訪問 11月下旬　4) 一斉指導：中間発表会 2月上旬　5) 一斉指導：最終発表会
授業の方法	学生による教育支援活動を実施する。これは直接的な社会への貢献となるばかりでなく，自己実現の場ともなり，教職を志す者にとって貴重な体験となる。また，学びながら無償で子どもたちの教育を支援するこの活動は，社会人としての成長と教職への自覚を促す契機となる。このような教育支援活動に学生が積極的に参加できる場を提供し，所定の活動成果について単位認定を諮る。 具体的には，前期又は後期に行われる5回の一斉指導への参加を含み，一人あたり50時間程度以上の支援を原則に2単位相当とする。なお，支援形態等を考慮して当該年度の地域活動委員会で支援内容が適正であるかどうかを判断する。その他，本学が主催・後援する教育支援活動に関わる各種行事に参加する。
教授者の現場経験	・各学生が出向くフィールドにおいて、現場教員が指導・助言を行っている ・各市町村の教育委員会、各校種の現場教員による事前・事後指導を行っている
観点に応える理由	授業の内容の「支援活動開始」の部分が，観点の「地域社会との連携にかかる実践的教育」に対応する内容である。 授業の方法の「学生による教育支援活動を実施する。これは直接的な社会への貢献となるばかりでなく，自己実現の場ともなり，教職を志す者にとって貴重な体験となる。」「本学が主催・後援する教育支援活動に関わる各種行事に参加するの部分が，観点の「地域社会との連携にかかる実践的教育」を実現するための工夫である。

授業科目名	知的障害児の余暇と健康
修得年次	1年-4年
必須・選択	選択
授業計画	1．オリエンテーション・障害と余暇・健康概説：余暇は権利？ 2．障害者が余暇活動を行う意味とは：障害者の発達と健康 3．知的障害者の余暇活動と健康 4．知的障害者の余暇活動とスポーツ 5．脳機能の理解とてんかん 6．運動のコントロールと障害・脊髄損傷 7．運動のコントロールと障害・脳性麻痺 8．障害者のスポーツ活動の歴史的展開とその意義 9．肢体不自由児者の健康とスポーツ 10．海外の障害者の余暇健康支援とスポーツ活動 11-14.障害者の身体活動を通した発達支援の実際 障害者のスポーツ活動支援の実際 障害者の運動遊びの支援の実際 心理運動法（Psychomotorik） 15．障害と余暇・健康に関するまとめと展望：まとめと評価
授業の方法	学校卒業後の地域生活において、余暇活動を通した生活の質の向上、スポーツなどを通した健康の維持増進は欠かすことの出来ない要件である。また休日や長期休業中の余暇活動を支援することも重要である。 本講義は、障害児にとっての余暇活動の意義とその内容を理解するとともに、スポーツなどの実際の活動の支援方法などについて理論と実践を通して理解する。そのために実際の活動時の映像の視聴を通して、その意味や実践方法について受講者で討議する。さらに実際の支援方法などについて体験する。
教授者の現場経験	知的障害児者、肢体不自由児者支援施設におけるスポーツ・余暇指導経験者
観点に応える理由	授業の内容の「障害者の身体活動を通した発達支援の実際、障害者のスポーツ活動支援の実際、障害者の運動遊びの支援の実際」の部分が，観点の「地域社会との連携にかかる実践的教育」に対応する内容である。 授業の方法の実際の活動時の映像の視聴を通して、その意味や実践方法について受講者で討議する。さらに実際の支援方法などについて体験するの部分が，「地域社会との連携にかかる実践的教育観点」を実現するための工夫である。

授業科目名	教職実践演習
修得年次	4年
必須・選択	必須
授業計画	１．ガイダンス ２．電子ポートフォリオに基づいた、個人の学習履歴と傾向を自己分析 ３．個人の課題を克服し、かつ得意な点を活かせる活動の選択 ４～７．各選択コースにおける活動 (a)特別支援学校、特別支援学級、地域福祉機関などにおける指導補助 (b)自助団体や家庭でのボランティア（個別学習指導や生活スキル指導、余暇支援） (c)個別の技術指導（アセスメントや観察法、研究調査など） ８．中間報告会 ９～１２．各選択コースにおける活動 (a)特別支援学校、特別支援学級、地域福祉機関などにおける指導補助 (b)自助団体や家庭でのボランティア（個別学習指導や生活スキル指導、余暇支援） (c)個別の技術指導（アセスメントや観察法、研究調査など） １３～１４．グループまたは個別に実施した活動についてのまとめ １５．実践発表会
授業の方法	これまでの教職課程の履修や教育実習を電子ポートフォリオを活用して全般的に振り返り，教員として求められる次の4つの観点について，各自の達成度や課題を明確にし，不足している点を明らかにする。ついで，専攻あるいは学生ボランティア派遣事業が提供するプログラムに参加し不足していた知識や技能を補う。 ①教科・保育内容等の指導力に関する事柄 ②幼児・児童・生徒理解や学級経営に関する事項 ③社会性や対人関係能力に関する事項 ④教職に関する使命感や責任感，教育的愛情に関する事項 さらに中間、終了時に全員で取り組み成果に関する報告会を行い討議を行うことで相互の理解を深める。
教授者の現場経験	スタッフはそれぞれ特別支援学級等の教員、知的障害児者、肢体不自由児者支援施設の指導者、療育・相談機関・病院（発達障害児を含む）のセラピスト等の経験を有している。
観点に応える理由	授業の内容の(a)特別支援学校、特別支援学級、地域福祉機関などにおける指導補助、(b)自助団体や家庭でのボランティア（個別学習指導や生活スキル指導、余暇支援）、(c)個別の技術指導（アセスメントや観察法、研究調査など）の部分が，観点に対応する内容である。 授業の方法の「専攻あるいは学生ボランティア派遣事業が提供するプログラムに参加し不足していた知識や技能を補う」の部分が，観点の地域社会との連携にかかる実践的教育を実現するための工夫である。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ｂ－２７－１　学校経営、危機管理、国際理解、人間尊重の教育の指導についての基礎的・基本的な知識・技能を培う研究が行われているか。
観点の説明	これらは、教員として基礎・基本となるものであって、社会の変化に対応しながら適切に身につけておく必要がある。
点検事項	研究の成果を現すもの（研究論文等） 関連する授業科目と授業計画
※作成部局名	

※［観点に係る状況］作成日　平成２８年　１月２６日

危機管理に関わることとして，課外活動（部活，サークル活動）のリーダーに対する研修が最低年１回実施されている。また，国際理解の教育に関わり「比較文化」という授業科目で，日本国際協力センター（JICE）から派遣される複数の講師が，異文化理解に繋がる各国の文化事情を紹介し，ワークショップ等を行っている。その他，人間尊重の教育に関わって，教養必修科目「倫理・人権」が平成２３年度から開講されている。

※［関係資料］

別紙，リーダー研修開催要項及び「比較文化」，「倫理･人権」のシラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	Ａ－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年3月2日

1．点検の概要

18歳人口の半数以上が大学等に進学している現在、学力レベルあるいはレポート作成能力やディスカッション能力などの学習技術、学習意欲などにばらつきがある学生が入学してきているのが現状である。さまざまなレベルの能力を持つ入学者が、大学で円滑に学修・研究活動を行っていけるようにするために、本学では、共通基礎科目の中に「アカデミックスキル」を全学生の必修科目として位置づけている。この「アカデミックスキル」で、大学での学習を遂行するための能力のうち、特定の分野によらず全員が身に着けるべきスキルとして、目的に応じて図書館情報等の調べ方、レポートの作成の仕方を学ばせる。また、共通基礎科目の中の「情報機器の操作」で、インターネットなどを使って、専門領域に関連した必要な情報を積極的に収集・活用し、自己学習の発展向上を図ることも学ぶ。これらにより、系統的に「学び方を学ぶ」姿勢を身につけさせ、自己学習の発展向上を図ることも学ばせているため、当該観点の目的が充分に達成されていると判断し、前回は、この2科目のみを報告した。

今回、教育課程全体でこの観点が達成されているかが問われているため、他の必修科目も含めて分析を行ったので、報告する。

実践教育科目の中の「教職論」の中で、学校の日常的教育実践（教授・訓育・管理活動）が直面している具体的諸課題を、「教育課程と教育方法」の中で、子どもの生活に正しく向かい合い、現実の教育に生起している課題やニーズを捉えるとともに学校教育が抱えている現代的な課題の解決に迫る理論的な動向についてなどを学ぶ。

教育実践フィールド科目の「特別支援教育」の中で、今日的教育課題である、学習に困難を持つ児童生徒の理解について、さらに、注意欠陥・多動性障害及び自閉症スペクトラム障害の特性を展望し、発達障害特性を持つ児童生徒の具体的な支援策などについて学ぶ。

教育実践フィールド科目に位置づけられる「基礎実習」ならびに「教育実習I」を通じ、実際に自ら児童・生徒と接する中から、学生一人ひとりが具体的な教育課題を発見するとともに、実習校の指導教員らと課題解決にむけた取り組みがなされる。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

教育実践科目の中に「教職実践演習」がある。この科目は、『教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになること（文部科学省）』を期待して設けられた科目である。

本学では、「教職実践演習」の中で、学生自身が、４年前期までの教職課程の履修や教育実習を電子ポートフォリオを活用して全般的に振り返り、教員として求められる次の4つの観点

１．教科・保育内容等の指導力に関する事柄

２．幼児・児童・生徒理解や学級経営に関する事項

３．社会性や対人関係能力に関する事項

４．教職に関する使命感や責任感、教育的愛情に関する事項

について、各自の達成度や課題を明確にし、不足している点を明らかにする。ついで、専攻あるいは学生ボランティア派遣事業が提供するプログラムに参加し不足していた知識や技能を補うこととなる。

これらの必修科目を通じ、当該観点は充分に達成されていると判断する。尚、この分析は旭川校の全学生に共通な必修科目のみを記載している。これらの科目のほかに、専攻がその専攻の特色を発揮するために指定する必修科目、選択必修科目のほか、学生自身が自らの興味あるいは強化しようとする資質に応じて履修が可能な選択科目が用意されており、それらを通じても教員として必要な力量を高めることが可能である。

2．点検事項

1）授業科目名、修得年次、必修or選択、授業計画

授業科目名	カリキュラム上の位置づけ	修得年次	必修の別	理論と実践	授業計画
アカデミックスキル	「教養科目」、「共通基礎科目」	1	必修科目	理論を中心に基礎基本の習得	別添資料「シラバス」参照
情報機器の操作	「教養科目」、「共通基礎科目」	1	必修科目		
教職論	「専門科目」、「実践教育科目」	1	必修科目		
特別支援教育	「専門科目」、「教育実践フィールド科目」	2	必修科目		
基礎実習	「専門科目」、「教育実践フィールド科目」	2	必修科目	実践を中心に知識理解の活用	
教育実習I	「専門科目」、「教育実践フィールド科目」	3	必修科目		
教職実践演習	「専門科目」、「実践教育科目」	4	必修科目	反省的考察を中心に実践的に探求	

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

2）授業の方法、3）教授者の現場経験

授業科目名	2)授業の方法	3)教授者の現場経験
アカデミックスキル	観点に応える理由は以下の点である。 1．講義形式：アカデミックスキルの重要性、ノートの取り方と要約の方法である。またもう1回はレポートの書き方、考え方についてである。また図書館が主催する図書館ツアーを専攻毎に行った。入学段階で図書館の使い方と文献検索等の方法を学ぶ。 2．演習形式：各専攻で個別的な指導を行った。3回はノートの取り方を指導し、残り9回で議論、レポート、プレゼンテーションを指導した。議論やレポートのテーマについては専攻や分野の特徴や特色を生かすため、それぞれに任せた。	渡壁　誠 （全体統括） 北海道教育大学教授、教員免許状更新講習講師、小中高等学校での現職経験はない。
情報機器の操作	観点に応える理由は以下の点である。 1．ワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトを活用して、生活や教育上の課題を解決できる。（課題解決型演習） 2．インターネットや電子メールを活用して、他者とやり取りができる。（コミュニケーション実践型演習） 3．目的や読み手などを考えながら、適切かつ効果的なWebページを制作できる。（技術取得型演習） 4．情報技術や情報社会などに関心をもち、その活用のあり方について考えを深めようとする。（反省的考察型講義演習）	上田　祐二 北海道教育大学教授、教員免許状更新講習講師、小中高等学校での現職経験はない。
教職論	観点に応える理由は以下の点である。 授業は、講義形式（一部、アクティブラーニングを含む）で実施している。この授業では、本学専任教員による講義の他に、「これからの教師に期待されるもの」「子どもたちとどう向き合うか」「教師の仕事・学校の仕事」「学校の仕事と家庭･地域」「特別の支援を必要とする子どもたち」といったテーマで、現職校長、附属学校園の教員、旭川市及び近郊の小中学校現職教員、特別支援学校の現職教員に講義をおこなっている（計５回）。また、授業の一部を各専攻・分野の教員が担当することで、教科教育・教科専門との結合を図った授業運営をおこなっている。	懸田　孝一 （全体統括） 北海道教育大学教授、教員免許状更新講習講師、小中高等学校での現職経験はない。
特別支援教育	観点に応える理由は以下の点である。 授業は講義形式により、特別支援教育概念が導入された意味、現代の子どもたちのさまざまな発達課題を理解し、特別な教育ニーズ を持つ児童生徒に対する具体的な教育アプローチを担える基本的力量を知的側面から獲得すること。 講義は2部構成あり、講義・質疑応答・定期試験を行う。パート1では特別支援教育が求められる時代的背景と特別支援教育の制度的枠組みを述べる。パート2では注意欠陥・多動性障害および自閉症スペクトラム障害の特性を展望し、さらに発達障害特性を持つ児童生徒の具体的な支援策を紹介していく。	萩原　拓 （全体統括） 北海道教育大学教授、教員免許状更新講習講師、小中高等学校での現職経験はない。
基礎実習	観点に応える理由は以下の点である。 1．講義形式： 基礎実習の心得、チェックリストの活用、授業参観のポイント、附属学校園の紹介	笠原　究 （全体統括） 北海道教育大学教授、

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

	2．実習形式：附属小・中学校授業参観・ 3．演習形式：反省的考察と交流を実施した。授業参観についての経験交流、複式授業の実際、小規模校の経営、小規模校参観に向けての目標設定 4．実習形式：小規模学校参観 をおこない、準備した学生プログラムを実施。 後日レポートにより、反省的考察を行う。	教員免許状更新講習講師、 公立高等学校15年以上
教育実習I	観点に応える理由は以下の点である。 学校現場の教育実習を通し、大学の課程において修得した知識、技能 教育の実際を有機的統合させる。また、教育実践の意味を認識するとともに、教育理論の深化に役立てことで、理論と実践の往還を実施する。 1.学校教育と教師の教育作用の本質や重要性を正しく理解する。 2.教師の仕事全般 渡る理解を深め、使命や責任を確認する。 3.児童・生徒の興味・関心等 対する感受性を高め、児童・生徒を理解する。 4.教科指導の学識や教育学的素養を広め、深める。 5.学校・学級経営の実際や教育の社会における役割を知る。 6.他の教師や実習生と連携した教育活動を展開する。	笠原　究 （全体統括） 北海道教育大学教授、 教員免許状更新講習講師、 公立高等学校15年以上
教職実践演習	観点に応える理由は以下の点である。 授業は演習形式で行われる。 1．ポートフォリオ自己評価にもとづく行動目標・計画の作成 2．実践演習を実施した。 3．附属幼稚園教員によるワークショップを実施した。 4．達成度評価に関する個別指導を実施した。 5．レポート作成指導を実施した。 6．総括・発表会を実施した。	藤田 由美子 北海道教育大学准教授、教員免許状更新講習講師、小中高等学校での現職経験はない。

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

シラバス「アカデミックスキル」、シラバス「情報機器の操作」、シラバス「教職論」、シラバス「特別支援教育」、シラバス「基礎実習」、シラバス「教職実践演習」

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

※印欄に記入する。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	A－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成27年12月24日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『アカデミックスキル』、カリキュラム上の位置づけは、「教養科目」、「共通基礎科目」

②修得年次は１年次

③必修の別は必修科目

④授業計画については別添資料「シラバス」参照

アカデミックスキルは大学入学時に大学での学習を遂行するために必要と考えられる能力のうち１：ノートの取り方，要約の仕方，２：調査の方法，３：レポートの書き方，４：議論の仕方，５：プレゼンテーションの方法の５つを取り上げ，これらに関するスキルを獲得・伸長させることを目的している。これらの能力は将来，教員として自らが考え問い続けるための基本的な能力である。第１学年においてこうした能力の基礎を形成し，大学４年間を通じてこれらを鍛練することで教員としての力を身に着けることが可能となる。

2）授業の方法

15回の講義のうち，2回は全学生を集めた講義にあてた，そのうち1回はアカデミックスキルの重要性，ノートの取り方と要約の方法である（同名パワーポイント参照）。またもう1回はレポートの書き方，考え方についてである（パワーポイント参照）。本学共通テキストの②ノートの取り方，⑤レポートの書き方，⑦グループディスカッションを配布した。また1回は図書館が主催する図書館ツアーを専攻毎に行うことにした。入学段階で図書館の使い方と文献検索等の方法を学ぶ。

残りの12回については，各専攻で個別的な指導を行った。3回はノートの取り方を指導し，残り9回で議論，レポート，プレゼンテーションを指導することにした。議論やレポートのテーマについては専攻や分野の特徴や特色を生かすため，それぞれに任せることにした。

生活・技術教育専攻技術分野では，3回のノートの指導において，全員の学生のノート（授業は任意）を書画カメラで投影し，全員で検討した（ルーブリックを活用）。3度の比較検討でどのようなノートが良いのかなどを各自自覚するように指導した。

議論では２つのテーマ：①小中一貫教育（技術分野の生き残りを考える），②部活動，課外活動（方法と意義）について4名程度のグループで議論し，最後に意見交流をおこなった。調査，レポート，プレゼンテーションでは，「自分が今または過去に熱中していた（楽しかったこと，面白かったこと）モノやこ

とについて，他人にも興味をもたせるにはどうしたらよいかを考える」をテーマとした。調査ではそのモノの歴史や実態を調査することにした。レポートは調査に基づいて自分がなぜそれに熱中していたのか，また他人に興味を持たせるような説明を行うことにし，発表では聴衆があなたの持っている興味関心に共感できるように行うことにした。

3）教授者の現場経験

全体指導は渡壁　誠（旭川校教養科目実施部会アカデミックスキル担当）旭川医科大学助手 11 年，愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所研究員 8 年，北海道教育大学教員 10 年

個別指導は，各専攻教員に依頼した。

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『アカデミックスキル』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

※印欄に記入する。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	Ａ－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成27年12月24日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『情報機器の操作』、カリキュラム上の位置づけは、「教養科目」のうちの「共通教養科目」である。

観点に応える理由は、以下の内容を持つからである。高度情報化社会に生きるためには，これまでの読み書き計算の能力（リテラシー）と並んで，コンピュータやネットワークを活用する能力を持つことが必要である。この授業では，コンピュータやネットワークを効果的に活用する基本的な技能を修得する。

②修得年次は１年次である。

観点に応える理由は以下の通りである。初年次に基礎基本を学び、その後に活用・発展させるため。

③必修科目としている。

④授業計画は別添資料「シラバス」参照。

2）授業の方法

観点に応える理由は以下の通りである。

1.ワープロ，表計算，プレゼンテーションソフトを活用して，生活や教育上の課題を解決できる。（課題解決型演習）

2.インターネットや電子メールを活用して，他者とやり取りができる。（コミュニケーション実践型演習）

3.目的や読み手などを考えながら，適切かつ効果的なWebページを制作できる。（技術取得型演習）

4.情報技術や情報社会などに関心をもち，その活用のあり方について考えを深めようとする。（反省的考察型講義演習）

3）教授者の現場経験

上田祐二（北海道教育大学教授、教員免許状更新講習講師、小中学校での現職経験はない。）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『情報機器の操作』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

※印欄に記入する。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	A－２７－２　学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。
観点の説明	学校がチームになって学校力を高める取組を進めている。この取組には、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能が不可欠であり、現場経験の豊富な教員による教授が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月20日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『学校経営と学級経営』であり、カリキュラム上の位置づけは、「専門科目」の「教員養成コア科目」のうちの「実践教育科目」としている。教育職員免許法施行規則に定められた「教育の基礎理論に関する科目」のうち、「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」を内容とする授業科目として、本学で開設されているものである。

観点に応える理由は以下の点である。この授業は、「学級内の人間関係」「学級経営における教員のリーダーシップ」「学校組織と校務分掌、教員間の協働」「教員の労務管理」「学校と教育委員会」「学校と家庭・地域の連携」「学校評価」「学校の危機管理」等を授業内容として含み、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能の習得やチームとして学校力を高める取組への理解を深めることが目指されている。

②修得年次は3年次である。

観点に応える理由は、本学カリキュラム構成の柱である「理論と実践の往還」に沿って、本科目で実施した内容を活用し、3年次の「教育実習Ⅰ」や4年次の「教育実習Ⅱ」における体験を学級経営や学校経営の視点から反省的に考察できるよう修得年次を設定している。

③必修の別は選択科目としている。

④授業計画については別添資料「シラバス」参照

2）授業の方法

授業は講義形式でおこなわれている。観点に応える理由は以下の点である。営利企業や行政機関、病院などの他の組織との比較において、学校組織の持つ独自性や組織内の人間関係に関わる課題を理解するとともに、他の先進国における学校経営や学級経営との比較を通して、日本の学校経営や学級経営の今日的な課題を探究している。以上を通して、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能を理論的・実践的に習得することが図られている。

3）教授者の現場経験

①橋野晶寛（小中高等学校の現職経験なし、北海道教育大学旭川校教育発達専攻教育学分野、専門分野：教育制度論・教育経営学）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『学校経営と学級経営』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－２　学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。
観点の説明	学校がチームになって学校力を高める取組を進めている。この取組には、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能が不可欠であり、現場経験の豊富な教員による教授が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す １）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 ２）授業の方法 ３）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成27年12月24日

１）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『教育課程と教育方法』、カリキュラム上の位置づけは、「専門科目」の「教員養成コア科目」のうちの「実践教育科目」である。

　観点に応える理由は、以下の内容を持つからである。

1.教育課程と学校経営や授業との関係を述べることができる。

2.教育課程や教育方法に関わる基本的な考え方について理解し考察を加えながらまとめることができる。

3.想定した学校の教育目標実現に向けた教育課程の編成と授業計画の作成の方法について自分の考えをもてる。

②修得年次は２年次である。

③必修科目としている。

④授業計画は別添資料「シラバス」参照。

２）授業の方法

観点に応える理由は以下の内容について教育実践をもとに、総合的に把握させ、学校・学級経営と関連づけさせる点であり、レポート課題をもとにしたアクティブラーニングを取り入れている点である。

（以下の数字は、シラバスでの授業進行回を示す）

2学習指導要領の変遷

3教育課程の意義と法的根拠

4学習指導要領と教育課程

5教育課程と教育内容

6教育課程の編成

7教育課程の実施と授業研究

8授業と教材研究，教材解釈

9児童生徒の実態把握

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

10学習指導案の作成，学習状況の見取りとその対応
11教育実践の実際（指導技術，学習課題，発問，板書）
12へき地・複式教育
13 学習評価，指導要録【認定論文題提示】
14.学級経営

3）教授者の現場経験
大久保清人（北海道教育大学非常勤講師、小中学校校長）

※［関係資料］
（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）
『教育課程と教育方法』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］
（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	Ａ－２７－２　学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。
観点の説明	学校がチームになって学校力を高める取組を進めている。この取組には、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能が不可欠であり、現場経験の豊富な教員による教授が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す １）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 ２）授業の方法 ３）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月12日

１）授業科目名、習得年次、必修or選択、授業計画

授業科目名は「教育実習事前事後指導」である。事前指導では、これまでの学習の成果を確認し、実習に向かう心構えを確立するために必要な実践的講義を行う。事後指導は、各自の経験を交流し、より幅広い識見を身につけられるようにすることを目的としている。基礎実習の事前事後指導は２年次必修の科目であり、教育実習Ｉの事前事後指導は３年次必修の科目となっている。また、４年次の希望者に対する選択科目として、教育実習Ⅱ、幼稚園実習、特別支援実習の事前事後指導がそれぞれ設定されている。

それぞれの事前事後指導において、経験豊富な現場の教員を講師として招聘し、様々な講義を設定している。特に教育実習Ｉの事前指導で招いた上中芳昭校長には「生きる力を育む学校教育」と題した講義で学校経営全般についての話をしていただいた。また、高橋孝明教諭には「小学校における学級経営の基本的事項」、上原丈典教諭には「中学校における学級経営の基本事項」という講義で、それぞれの校種の学級経営について説明していただいた。まさに上記観点に応える講座である。

２）授業の方法

講義形式ではあるが、ときに学生に対して質問を投げかけ、自分の頭で考える時間を設けるなど、説明が浸透する要は工夫をしていただいた。上記観点に十分応える内容であったと考える。

３）教授者の現場経験

笠原究（コーディネーター教員、北海道教育大学教授、公立高等学校15年以上、免許更新講習講師）

上中芳昭は昭和５７年に本学旭川校を卒業し、現在旭川市立中和中学校校長である。指導暦は３０年以上に及ぶ。

高橋孝明は平成１０年に本学旭川校を卒業し、現在旭川市立春光小学校教諭である。指導暦１８年の中堅教員である。

上原丈典は平成５年に本学旭川校を卒業し、現在旭川市立北星中学校教諭である。指導暦２３年の中堅教員である。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

「教育実習事前事後」シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	Ａ－２７－２　学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。
観点の説明	学校がチームになって学校力を高める取組を進めている。この取組には、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能が不可欠であり、現場経験の豊富な教員による教授が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月20日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『教職論』、カリキュラム上の位置づけは、「専門科目」の「教員養成コア科目」のうちの「実践教育科目」としている。教育職員免許法施行規則に定められた「教職の意義等に関する科目」として、本学で開設されているものである。

観点に応える理由は以下の点である。この講義は、「教職の意義や教師の職務内容、専門職としての教師の役割」「教師に求められる資質・能力」「学校の日常的教育実践が直面している具体的諸課題」「学校と地域・家庭間の連携に関わる諸課題」等を授業内容として含み、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能の習得を図ることを目指している。

②修得年次は１年次である。

観点に応える理由は、本学カリキュラム構成の柱である「理論と実践の往還」に沿って、本科目で実施した内容を活用し、２年次の「基礎実習」や３年次の「教育実習」における体験を学級経営や学校経営の視点から反省的に考察できるよう修得年次を設定している。

③必修の別は必修科目としている。

④授業計画については別添資料「シラバス」参照

2）授業の方法

授業は、講義形式（一部、アクティブラーニングを含む）で実施している。観点に応える理由は以下の点である。この授業では、本学専任教員による講義の他に、「これからの教師に期待されるもの」「子どもたちとどう向き合うか」「教師の仕事・学校の仕事」「学校の仕事と家庭･地域」「特別の支援を必要とする子どもたち」といったテーマで、現職校長、附属学校園の教員、旭川市及び近郊の小中学校現職教員、特別支援学校の現職教員に講義を行っていただいている（計５回）。また、授業の一部を各専攻・分野の教員が担当することで、教科教育・教科専門との結合を図った授業運営をおこなっている。

3）教授者の現場経験

①懸田孝一（小中高等学校の現職経験なし、北海道教育大学旭川校教育発達専攻教育心理学分野、専門分野：教育心理学）、藤田由美子（小中高等学校の現職経験なし、北海道教育大学旭川校教育発達専攻幼児教育分野、専門分野：幼児教育学・教育社会学）、川端美穂（小中高等学校の現職経験なし、北海道教育大学旭川校幼児教育分野、専門分野：幼児心理学・発達心理学）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

②吉崎隆（旭川市立知新小学校長）、佐藤保（旭川市立神楽中学校長）、岡澤好弘（旭川市立忠和小学校長）（「これからの教師に期待されるもの」というテーマで講義を実施）

③林崎俊一（附属旭川小学校主幹教諭）、加藤慎司（附属旭川中学校教諭）、棚橋裕子（附属旭川幼稚園教諭）（「子どもたちとどう向き合うか」というテーマで講義を実施）

④東海林秀樹（東川町立東川小学校教諭、教職歴26年「教師の仕事と家庭・地域」というテーマで授業を実施）

⑤成田麻友子（旭川市立中央中学校教諭、教職歴24年教師の仕事・学校の仕事」というテーマで授業を実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『教職論』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	Ａ－２７－３　一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業が行われているか。
観点の説明	保護者・地域との連携や教員が組織として機能するためには、社会性・コミュニケーション力や問題解決のための分析能力の獲得が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成27年12月24日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『コミュニケーション実践』、カリキュラム上の位置づけは、「教養科目」の「人間子ども理解に関する科目」としている。

観点に応える理由は以下の点である。近年、中教審答申の中で繰り返される教師に必要な「コミュニケーション（能）力」の意味について批判的に考察した。同時に、教師として、子ども・若者たち、同僚、保護者、地域の人々と、どのような関係性を築いていくのか、また、教師としてどのようにありたいのかを考察し、同時に、それらの思いを実現するための技法やふるまいを身体化することを目指した。

②修得年次は２年次である。

観点に応える理由は、本学カリキュラム構成の柱である「理論と実践の往還」に沿って、本科目で実施した内容を活用し、３年次の「教育実習」の実践においてコミュニケーション力について反省的に考察する点である。

③選択科目としている。

④授業計画については別添資料「シラバス」参照

2）授業の方法

観点に応える理由は以下の点である。演習（ワークショップ形式）を行い、所謂、アクティブラーニングの方法を採用している。この授業では、混沌としたコミュニケーションにまつわる事象について、その深みを失わないまま、コンセプチュアルに捉えながら学んでいくため、コミュニケーションに関連する学びの内容に「テーマ」をたてた。その「テーマ」に沿って、コミュニケーションゲームやアクティビティを行った。授業内で扱うテーマの例は、「自己、他者、関係性、聞く、話す、見る、言葉、感情、身体、声、空間、場、物語、教師になる」が含まれる。

3）教授者の現場経験

川島裕子（中学校非常勤講師１年、教員免許状更新講習講師、北海道教育大学特任研究員）、

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『コミュニケーション実践』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	A－２７－３　一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業が行われているか。
観点の説明	保護者・地域との連携や教員が組織として機能するためには、社会性・コミュニケーション力や問題解決のための分析能力の獲得が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成27年12月24日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『教職実践演習』、カリキュラム上の位置づけは、「専門科目」の「教員養成コア科目」のうちの「実践教育科目」としている。

観点に応える理由は以下の到達目標をもつ点である。

1. 教師としての職責や教職の特殊性を理解するとともに，自ら向上を重ねることができる
2. 他の教職員や保護者，地域の関係者等と連携・協力して教育活動を行うことができる
3. 生徒指導に関わる基礎的な知識・技能を身につけるとともに，子ども理解や指導の場で活用することができる
4. 学習指導に関わる基礎的な知識・技能を身につけ，実際の場面で用いることができる

②修得年次は４年次である。

観点に応える理由は、これまでの教職課程の履修や教育実習について電子ポートフォリオを活用して全般的に振り返り，教員として求められる能力について，各自の達成度や課題を明確にし，不足している点を明らかにする点である。

③必修科目としている。

④授業計画については別添資料「シラバス」参照

2）授業の方法

専攻あるいは学生ボランティア派遣事業が提供するプログラムに参加し不足していた知識や技能を補う。

1.教科・保育内容等の指導力に関する事柄
2.幼児・児童・生徒理解や学級経営に関する事項
3.社会性や対人関係能力に関する事項
4.教職に関する使命感や責任感，教育的愛情に関する事項

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成 27 年度実施）

3）教授者の現場経験

相馬一彦（北海道教育大学教授、北海道教育大学附属旭川中学校校長、公立学校教員 20 年以上、教員免許状更新講習講師）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『教職実践演習』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	A－２７－３　一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業が行われているか。
観点の説明	保護者・地域との連携や教員が組織として機能するためには、社会性・コミュニケーション力や問題解決のための分析能力の獲得が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年１月８日

（上記観点及び観点の説明を踏まえ、点検事項について記述する。必要に応じ点検事項以外について記載して構わない。別紙記載可）

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目は『倫理・人権』、カリキュラム上の位置づけは「教養科目」の「共通基礎科目」のうちの「倫理・人権」としている。

観点に応える理由は以下の点である。本授業は「倫理・人権及びコンプライアンス（法令順守）の基本を学ぶとともに、将来学校教員として…、これらの価値を教育・伝達していく際の基礎的内容を習得する」ことを目標としており、一般的な社会人としての常識を培う授業であると言える。

②修得年次は１年次である。

観点に応える理由は以下の点である。大学生となることは社会人として一歩を踏み出すことであり、一般的な社会人としての常識は大学の初年次から身につけるべきものである。

③必修 or 選択　必修科目としている。

④授業計画については別添資料「シラバス」参照。

2）授業の方法

観点に応える理由は以下の点である。講義形式の授業を行い、一般的社会人の常識的な知識として、倫理・人権およびコンプライアンスに関する基礎的な知識を学び、差別・人権抑圧の被害者や加害者にならないために必要な知識を学んだ。それらの講義で得られた知識を踏まえて、20 名程度のクラス編成で演習を実施した。演習においては、演習課題について学生間でグループ・ディスカッションを行い、演習課題を協働して解決する活動を行うことで、他者と協働しながら問題を解決するための基礎的な技能と態度を培った。

3）教授者の現場経験

全体コーディネーター教員

名達英詔（北海道教育大学教授、公立小中学校 20 年以上、免許更新講習講師）

①籾岡宏成（北海道教育大学旭川校准教授）

②龍島秀宏（北海道教育大学教職大学院准教授）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

③廣重真人（北海道教育大学釧路校准教授）
④畑地雅之（弁護士・旭川弁護士会）
⑤佐々木周（北海道教育大学旭川校准教授）
⑥千葉胤久（北海道教育大学旭川校准教授）
⑦佐々木絵里沙（精神保健福祉士・旭川市北星・旭星地域包括支援センター）
⑧川田美保子（スクールカウンセラー。シラバスには西村睦子氏の名前が記載されているが、都合により川田氏に代わって担当していただいた。授業内容はシラバスの通り。）
⑨旭川市政策調整課員

※［関係資料］
（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）
『倫理・人権』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］
（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	A－２７－４　地域社会との連携にかかる実践的教育が行われているか
観点の説明	価値観の多様化やメディアの発達により，児童・生徒が校外で接する様々な要因は，学習や生活習慣に影響を与えている。家庭を含む地域社会の理解と支援なくしては，児童・生徒への効果的な指導は困難である。一方で，学校や教師も地域社会の一員であることから，教員養成課程でもその自覚を促し，実践できる場を設ける必要がある。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名，修得年次，必修 or 選択，授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月14日

1）授業科目名，修得年次，必修 or 選択，授業計画

①授業科目名は『教育フィールド研究Ⅰ』，カリキュラム上の位置づけは，「専門科目」の「教員養成コア科目」のうちの「教育実践フィールド科目」としている。

観点に応える理由は以下の点である。ボランティア活動は自分から進んで，自分たちの住んでいる社会をよりよくするために活動するものであり，その活動を通じてボランティア自身も磨かれ成長すると言われている。特に，青少年期にボランティア活動をすることは，その後の人間形成に極めて大きな意義を持つと言われ，教職を志す者にとっては大変貴重な体験になると考えられる。この授業では，地域教育に対する支援活動を通して地域社会に貢献するとともに，学生のボランティア意識の高揚やコミュニケーション能力の獲得，及び教職に求められる資質能力の向上を目指した。

②修得年次は１～4年次である。

③必修の別は選択科目としている。

④授業計画については別添資料「シラバス」参照

＜支援活動の概要＞

５月：入塾式，第１回農業体験

６月：酪農体験打合せ

７月：第２回農業体験

８月：酪農体験

９月：第３回農業体験

１０月：果樹体験

１１月：収穫祭・修了式

2）授業の方法

観点に応える理由は以下の点である。本活動は，旭川市が主催で，小学校４，５，６年生を対象に行っている「子ども農業体験塾」に，ボランティアとして参加し，子ども達を補助する活動を行うものである。

具体的には，子ども達が行う田植えや畑仕事などの農作業，搾乳などの酪農体験，収穫祭等でのサポートである。受け入れ窓口担当の旭川市農政課を訪問した際，「参加している児童との関わりに戸惑いを感じながらも，参加学生同士の相談や他の学生の関わり方を参考にしながら，徐々にスムーズな対応ができ

るようなって行く様子が実感できた。特に，複数回活動を経験している児童は，活動内容や作業内容を理解しており，相当に苦労していた。しかし，互いの立場を尊重し合える仲になるよう努力していた。」という報告をいただいた。

児童生徒との関わり方を学ぶ貴重な機会となっており，「教える立場」の難しさを実感できたことは教職を目指す学生にとって大きな刺激となったと思われる。同時に，児童だけではなく協力いただいている農家の方との関わりを通して，人間関係調整力，コミュニケーション能力を向上させる場となっていると考える。

3）教授者の現場経験

①渥美伸彦（小学校教員13年，教育委員会5年，教員免許状更新講習講師，北海道教育大学准教授），

②手塚真一（小学校教員14年，中学校教員12年，中学校教頭5年，中学校校長7年，北海道教育大学教職実践コーディネーター）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し，当該資料を添付する。別紙記載可）

『教育フィールド研究Ⅰ』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	A－２７－４　地域社会との連携にかかる実践的教育が行われているか
観点の説明	価値観の多様化やメディアの発達により、児童・生徒が校外で接する様々な要因は、学習や生活習慣に影響を与えている。家庭を含む地域社会の理解と支援なくしては、児童・生徒への効果的な指導は困難である。一方で、学校や教師も地域社会の一員であることから、教員養成課程でもその自覚を促し、実践できる場を設ける必要がある。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成27年12月24日

1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画

①授業科目名は『教育フィールド研究２』、カリキュラム上の位置づけは、「専門科目」の「教員養成コア科目」のうちの「教育実践フィールド科目」である。

観点に応える理由は、以下の目標をもつからである。教育現場への参加・体験を通して、教職への意欲や実践力を高めるとともに、実習等への具体的な課題を焦点化する。

②修得年次は1～3年次である。

観点に応える理由は以下の通りである。2年次に基礎基本を学び、その後に活用・発展させるため。

③選択科目としている。

④授業計画は別添資料「シラバス」参照。

2）授業の方法

観点に応える理由は以下の参加を通し実践と反省的考察を行う点である。

・小学校運動会への参加・協力
・小学校ブラスバンド活動への協力
・幼児対象の音楽教室の見学と参加
・小学校学芸会への参加・協力
・年間の活動を総括する。

3）教授者の現場経験

芳賀　均（北海道教育大学講師、公立学校教員20年以上、教員免許状更新講習講師）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

『教育フィールド研究２』シラバス

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	Ｂ－２７－１　学校経営、危機管理、国際理解、人間尊重の教育の指導についての基礎的・基本的な知識・技能を培う研究が行われているか。
観点の説明	これらは、教員として基礎・基本となるものであって、社会の変化に対応しながら適切に身につけておく必要がある。
点検事項	研究の成果を現すもの（研究論文等） 関連する授業科目と授業計画
※作成部局名	旭川校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月22日

（上記観点及び観点の説明を踏まえ、点検事項について記述する。必要に応じ点検事項以外について記載して構わない。別紙記載可）

1.学校経営の研究において

⑴笠井稔雄（教授、旭川校、教職大学院）が専門分野を「学校経営学、教育法法学」としている。その関連授業科目として「学校教育の課題と教員」、「これからの時代の学校教育の在り方ー学校課題と学校改善計画」を担当している。

⑵橋野晶寛（准教授、旭川校）が専門分野を「教育行政学，教育政策論，教育経営学」としている。その関連授業科目として「学校経営と学級経営」、「教育制度・学校経営演習」を担当している。

2.危機管理の研究において、旭川キャンパスでは、専門分野・研究テーマを危機管理とする構成員はいない。この事項に関連する科目は「教育実習事前事後指導」となり、非常勤講師が講義内で解説をしている。

3.国際理解の研究において

⑴　金　玹辰（准教授、旭川校）が専門分野を「地理教育における国際的動向」としている。関連授業科目として「小学校社会科教育法」「中学校社会科教育法Ｉ」を担当している。

⑵　笠原　究（教授、旭川校）が専門分野を「第２言語習得，語彙習得，コロケーション」としている。その関連授業科目は「外国語（英語）Ｉ」、「英語教育学演習Ｉ」を担当している。

4.人間尊重の教育の研究において

⑴千葉　胤久（准教授、旭川校）が専門分野を「哲学・倫理学」としている。その関連授業科目として「現代と社会２」、「社会科教材開発研究2」を担当している。

⑵　藤田　由美子（准教授、旭川校）が専門分野を「教育社会学」「ジェンダー」としている。関連する授業科目として「教育フィールド研究Ｉ」「教職論」を担当している。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

関連の研究著書・論文は、別紙掲載。

担当科目は

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

※印欄に記入する。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

観　点	A－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	釧路校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年３月14日

【観点を満たす学びの体系】

教員養成課程のすべての学生を対象として、体系的に以下のとおり必修科目として実施している。

１　教養科目のうち基礎共通科目の「アカデミックスキル」において、図書館利用をはじめとした文献利用法・引用方法・調査方法・論文レポート執筆方法を採り上げて、学習・研究方法の基礎を指導している。資料は共通資料を使っているが、各指導教員のグループ単位で指導している。そのため、ワークショップ方式で学び方・考え方を指導している。

「情報機器の操作」において、ワード・エクセル・パワーポイント・動画づくり・伝黒板の利用方法等を指導している。これらは、論文を書く際や、プレゼンテーションを行う場合に必要であり、アクティブにつながるものである。特に ICT 利用による授業設定は、これからの能動的な学習活動および少人数指導の基礎となるもので、基本的な教員養成での大学での学習指導技術や指導姿勢を培っている。

２　実践教育科目，教育実践フィールド科目，教科指導科目，教科内容研究科目において，教育についての理論を学ぶとともに，教育現場での実践を振り返りながら教員がそなえるべき資質能力について自ら考えるとともに，自身の適性や不足している資質能力の獲得を図る。

「教職論」では、全般的な教師の仕事の範囲をとらえ、４年間で学ぶ教育学の実践的な内容をとらえる。「教職論」（実践教育科目）と「基礎実習」「教育フィールド研究」（教育実践フィールド科目）は，相互に関連のある授業科目である。教職論は１年次前期に講義として学び、教育フィールド研究は、１年次後期から学校現場に出かける。理論を踏まえた上で実践を行い、さらに現場の実践を踏まえた上で、「教育の基礎と論理」などの教職系科目で、さらに理論的な観点を養う。

「基礎実習」では、観察参加実習として、復元指導案を書いたり、観察日誌の中で、授業記録を取ったりする。すでに学校現場での教育フィールド研究も終えているので、比較的いくつかの授業を見ているので、比較しながら、復元指導案や授業記録を取ることができる。

「教育フィールド研究」では、毎週１日を学校現場に出て観察しながら実践を行う。１年間を通じていくので、年間の学校の行事・授業体系をとらえることができる。また教師が声かけをするスキルを学ぶ。その延長で、「教育フィールド研究」と「教育実習 I」は関連しており、実践の延長と深化のふり返りとして位置づけている。

「教育実習」では、教育フィールド研究と同様に、チェックリストを用いて、自らの実践を振り返る。教育実習期間のみならず、１年間を通じて教育実習校に関わっているので、その後の理論的な教職科

目・教科教育科目とも関連付けながら、理論と実践の往還を図っている。

もう一つの重要な科目は「特別支援教育」（教育実践フィールド科目）である。これは、教員免許取得の関連科目として位置づけている。学校現場の実践の総合的な学校環境や対応方法等を考える意識を培っている。

3　「教職実践演習」において、電子ポートフォリオを用いること、また達成が不十分な点を補うようにしている。ロールプレイを含めて、最終的な実践力を培っている。

【釧路校の学びの特色】

1.　教育実習・教育実践科目の体系化

学校現場に対応するためには、講義を多く取るだけでは、実践的に考える力は出てこない。学校現場の実践がどのように行われているかをとらえること、そして自らそれを担える自己認識を持つこと、そして普遍的な課題に照らし合わせて発展的な課題をとらえていくことが課題となる。

そのため、まず早い段階で学校現場に入り、学校の実践がどのようになっているかをとらえる必要がある。さらにそれを発展的に課題実習としてとらえていくような、教育実習の体系化が不可欠である。

このような観点から、釧路校では、学校現場の課題に対応する特色として、「教育フィールド研究」を1年次から体系的にとらえていくプログラムを設定した。また一般的な教育実習を経た後で、へき地教育実習など多様な教育実習を展開できるようにしたことが、釧路校の特色である。

この教育実習体系をコアカリキュラムとした上で、教科教育科目・教職科目が理論的な内容として付与される。

2.　キャンパス共通科目群の設定

釧路校では、教科内容に付随する形で教科教育があるととらえるのではなく、教科を越えて普遍的な指導方法が独立してあるととらえる。このため、キャンパス共通科目群を設定した。この中には、「学習指導実践論」をカリキュラム上設定して次年度から開講する。

3.　各科目における指導方法の特色

1)．早くから学校現場に行くことで、実践を俯瞰する教育理論をとらえられるようにしている。

2)．一定の学校現場を最初に経験することで、理論と実践の往還の重要性を、実感しながら学ぶことができる。そのために、入学直後から6月までに学校現場に4日間赴くようにしている。講義と演習と学校現場訪問による実地体験を重視する。

3)．学校のあり方も多様であることから、1日は、「新入生研修」と称して、へき地小規模校を訪問するようにしている。

4)．演習的な実践は、少人数で行う必要があることから、各研究室の指導学生に分かれて、演習を行う。この演習内容は、研究室の専門性に依拠するため、各研究室が選択している。

5)．図書館への訪問や文献探索方法など、調べる力・読解力を高めるために、図書館での文献探索演習を行っている。

6)．全体講義等を学校での指導経験がある人が担当している。釧路校は学校現場の現職教員経験者が20名ほどいるが、さらに過半数が現場への指導経験を有している。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

教育実習の体系と実践的指導力の課題、教育実践に係る体系～学校の教育活動との関わり

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－１　自ら課題を追究し、情報を取捨選択しながら、自分で考え、粘り強く問い続ける姿勢を育む授業が行われているか。
観点の説明	学校現場の課題に対応するためには、教師自らが考え問い続ける力が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	釧路校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月25日

1.　１年次に授業科目名「アカデミックスキル」として、運営要領・スケジュール（別紙１）のとおり実施している。「アカデミックスキル」を修得するにあたり、まず、全体講義（別紙２）を行い、高校までの学習スタイルとは異なることおよび大学での学び方を学習する。また、大学で学ぶ姿勢および釧路校で学ぶ意義を、学生自身が自覚することで、あらゆる前向きな意欲が高まっていく。
2.　一定の学校現場を最初に経験することで、理論と実践の往還の重要性を、実感しながら学ぶことができる。そのために、入学直後から６月までに学校現場に４日間赴くようにしている。講義と演習と学校現場訪問による実地体験を重視する。
3.　学校のあり方も多様であることから、１日は、「新入生研修」と称して、へき地小規模校を訪問するようにしている。
4.　演習的な実践は少人数で行う必要があることから、指導学生の所属する研究室に分かれて演習を行う。この演習内容は、研究室の専門性に依拠するため、研究室選択している。
5.　図書館への訪問や文献探索方法など、調べる力・読解力を高めるために、図書館での文献探索演習を行っている。
6.　全体講義等を学校での指導経験がある人が担当している。釧路校は学校現場の現職教員経験者が 20 名ほどおり、過半数が現場への指導経験を有している。

※［関係資料］
（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）
・ 釧路校「アカデミックスキル」実施　運営要領（別紙１－１）
・ガイダンススケジュール（Ｈ２７．４．１０以降）（別紙１－２）
・「釧路校で学ぶ意味と高め合う学生の成長をめざして」（別紙２）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］
（優れた点）

（改善を要する点）

※印欄に記入する。

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ａ－２７－２　学級経営や学校経営に関する授業に現場経験の豊富な教員による指導が行われているか。
観点の説明	学校がチームになって学校力を高める取組を進めている。この取組には、学級経営や学校経営に関する基本的な知識や技能が不可欠であり、現場経験の豊富な教員による教授が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	釧路校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月25日

1．「教職論」は、１年次の必修項目であり、別紙１～４に添付している資料を用い、毎回教職員間の人間関係、児童生徒と教師の人間関係等を、実践的に講義しており、さらにそれを元にしたグループワークを実施している。これらは、３年次の選択項目である「学校経営と学級経営」と連動して、学級活動の基礎を築くものである。

2．教育実習事前指導は、３年次の必修項目となっており、７回分は実際の指導案作成と模擬授業を実施している。それによって、教壇に立って全体を指導することの難しさを実感するようにしている。

3．教育現場経験のある教員が多く、ICT を活用した授業および実践ワークショップを実施している。

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

・これからの時代に期待される教師像と求められる力量（別紙１）
・教師集団の協働的人間関係（別紙２）
・教師集団の協働的人間関係（別紙３）
・コミュニケーションゲーム（別紙４）
・教職論シラバス（別紙５）
・学校経営と学級経営シラバス（別紙６）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	A－２７－３　一般的な社会人としての常識や他と協働しながら問題を解決するための基礎的な知識・技能・態度を培う授業が行われているか。
観点の説明	保護者・地域との連携や教員が組織として機能するためには、社会性・コミュニケーション力や問題解決のための分析能力の獲得が求められる。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	釧路校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月25日

1.「地域学校教育論」は、１年次の必修項目であり、地域を根ざしコミュケーション力のある教師を育てることとした講義（概要は別紙１のとおり）を行っている。この他、釧路校は全体的に地域と連携した科目が多く、地域学校教育の理念と実践を踏まえた講義内容を展開している。

2.　倫理人権の概念は広いために、全般的に教師が考えなければならない人権課題は大変広いと言うことを理解してもらうようにしている。

　また、地域社会あるいは文化・スポーツ活動の積極的担い手として、これらの価値を教育・伝達していく際の基礎的内容を習得している。

※［関係資料］

（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）

・発達と教育Ⅰ（地域学校教育論）（別紙１）

・身近な倫理・様々な人権を守る立場としての教師（別紙２）

・倫理・人権シラバス（別紙３）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	A－２７－４　地域社会との連携にかかる実践的教育が行われているか
観点の説明	価値観の多様化やメディアの発達により、児童・生徒が校外で接する様々な要因は、学習や生活習慣に影響を与えている。家庭を含む地域社会の理解と支援なくしては、児童・生徒への効果的な指導は困難である。一方で、学校や教師も地域社会の一員であることから、教員養成課程でもその自覚を促し、実践できる場を設ける必要がある。
点検事項	・体系的に以下の点について示す 1）授業科目名、修得年次、必修 or 選択、授業計画 2）授業の方法 3）教授者の現場経験 ・観点に応える理由を示す
※作成部局名	釧路校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月25日

1.　釧路校の教育フィールド研究（1・2 年次必須）は、毎週学校現場に訪問する方式を取っており、学校現場と連携した実践教育を実施している。
　また、後期からは少しづつ学級の様子や子どもの様子を観察しながら、指導方法をシミュレーションしている。
2.　学校の体験は、授業だけでなく、包括的な内容を経験できるようにしている。
3.　地域の教育界からも、放課後学習など学校支援ボランティアを受けることでメリットがあると歓迎されている。

※［関係資料］
（上記を証明する資料の名称を記載し、当該資料を添付する。別紙記載可）
・教育実践に係る体系～学校の教育活動との関わり（別紙１）
・平成 27 年度教育実践フィールド科目の体系及び変更点（別紙２）
・教育フィールド研究Ⅰ・Ⅱシラバス（別紙３）

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］
（優れた点）

（改善を要する点）

国立大学法人北海道教育大学教員養成改革推進外部委員会による点検及び評価実施要項に基づく点検シート（平成27年度実施）

※印欄に記入する。

観　点	Ｂ－２７－１　学校経営、危機管理、国際理解、人間尊重の教育の指導についての基礎的・基本的な知識・技能を培う研究が行われているか。
観点の説明	これらは、教員として基礎・基本となるものであって、社会の変化に対応しながら適切に身につけておく必要がある。
点検事項	研究の成果を現すもの（研究論文等） 関連する授業科目と授業計画
※作成部局名	釧路校

※［観点に係る状況］作成日　平成28年1月25日

1．　国際理解を進めるために、グローバルな経験を積むことが求められている。そのために、アラスカなどにも学生を連れて、様々な国際的な経験と異文化理解を進めている。

2．　アラスカ訪問は、出版も行い、その成果を学生に教授している。

「アラスカと北海道のへき地教育--ALASKA：Visiting Rural Small School」

※［関係資料］

「アラスカと北海道のへき地教育--ALASKA：Visiting Rural Small School」

［分析結果とその根拠理由］

［優れた点及び改善を要する点］

（優れた点）

（改善を要する点）